
好きすぎて

秋月 弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きすぎて

【Zコード】

Z5823T

【作者名】

秋月 弥生

【あらすじ】

野分が宇佐見秋彦のファンだったら…

そして、宇佐見秋彦との突然の出会いに野分が取った行動とは？

作者の勝手な妄想から生まれたカツプリング「草間野分×宇佐見秋彦」のハチャメチャストーリー。

(前書き)

これは私の勝手な妄想で書きました。
ですので、純情エゴイスト（野分×弘樹）が好きな方にはお勧めしません。
それでも良いとこつ方だけお読みください。

草間野分はバイトが終わると、腕時計で時間を確認した。

今日は家庭教師を受ける日なのだが、家庭教師・上條弘樹の都合で夕方になつた。

家庭教師の時間までだいぶある。特に寄りたい所がない野分は、少し早いけれど

上條の家に向かうことにした。

さすがにこの時間では居ないかな。と思いつがりも、呼び鈴を鳴らす。

何回か押しても上條は出でこない。

帰つてくるまで、玄関前で待たせて貰うこととした。

ドアを背に座り込むと、カバンから愛読書である、宇佐見秋彦の小説を出して読む。

暫くして、誰かが近づいてくる足音に顔を上げた。

野分はその人の顔を見るなり、目を丸くする。

何とその人は、今まさに読んでいる本の作者、宇佐見秋彦だったのだ。

野分は急いで立つと、宇佐見に声を掛けた。

「宇佐見先生ですよね！俺、宇佐見先生の大ファンです」

「どうも」

野分は宇佐見に握手を求めて右手を出しが、宇佐見は手を出す前に野分に問いかけた。

「お前、弘樹の知り合いか？」

「俺、草間野分つて言います。ヒロさんに家庭教師をしてもらつてます」

「アソシ家庭教師やつてるのか…」

「はい。でもまだ帰つてないよつなので、ここで待たせてもらつて

ます

「そりか…」

「あ！失礼ですが、宇佐見さんはヒロさんとは、どういったご関係ですか？」

「幼馴染みだ」

「そうなんですか！ヒロさん凄いです」

この人懐っこいヤツから逃げよつ。と宇佐見は言葉を切り出す。

「居ないなら、また出直すか。それじゃ」

「あ！宇佐見さん！」

宇佐見は踵を返すと、野分に呼び止められて振り向く。

「なんだ」

「これからお仕事ですか？」

「いや、仕事は終わつた」

「では、少し俺に付き合つてもうえませんか？」

「付き合つ？」

「宇佐見さんに、話しがあります」

「話しなら、ここですればいいだろ」

「ここではなんですので、場所を変えましょつ」

宇佐見は不審に思つたが、話が気になつて承諾した。

「ああ、わかつた」

「ではいきましょつか」

そつそつた野分の目は鋭く、何処か悪びれた感じだつた。

宇佐見は野分について行く。

最寄の駅まで来ても、何も言わない野分に宇佐見は苛立つ。

「何処まで行くんだ」

「ついてくればわかります。あ、宇佐見さんは電車嫌いですよね。

タクシーで

行きましょつか

「おこ、まて！離せ！」

野分は瞬間に宇佐見の手を掴み、タクシー乗り場まで行く。

タクシーに宇佐見を乗せると、野分は運転手に目的地を告げた。

「野分は苛立つている宇佐見を気遣つて云つ。

「すみません。すぐに着きます」

「いつたい、このタクシーは何処に向かつてる」

「それは着くまで内緒です」

宇佐見はそう云う野分を睨みつける。

「あ、着きました。ここです」

野分は1件のアパートを指差すと、運賃を支払つて降りる。宇佐見

も野分に続いて

タクシーを降りた。

「ここは何処だ」

「俺の家です。中へどうぞ」

家の鍵を開けて宇佐見を中へ招き入れる。

宇佐見は部屋に入るなり、野分に手を掴まれて布団に押し倒される。

瞬間、宇佐見は逃げようとしたが、野分に押さえつけられ身動きが取れない。

「何をする！」

「俺は宇佐見さんが好きです。俺と付き合つてください」

「はあ？なぜ俺がお前と付き合わねばならんのだ」

「駄目ですか？」

「当たり前だ」

「では、付き合わなくともいいので、宇佐見さんを抱きたいです」

「抱きたい？お前なに云つて……んつ……」

野分は宇佐見の言葉を唇で遮つた。

すると宇佐見のズボンのファスナーを下ろし、宇佐見のモノを握つては扱き始めた。

「やめ……」

「宇佐見さんの熱いです」

何度も扱かれた宇佐見のモノは、すぐに形を変えた。

野分は付け根から先端に向かつて舌を這わせる。

宇佐見は野分の肩を掴んで必死に抵抗する。

「くわ…ま…やめ…る…」

「嫌です。俺は宇佐見さんを気持つよくさせたいんですけど」「なぜ…そこまで…する…」

「俺、云こましたよね。宇佐見さんが好きだからです」

野分は上手く舌を使って宇佐見を絶頂に導く。

「くわ…くわ…はな…せ…」

「では全て受け止めます。俺の口に出してかまこません」「はやく…はなせ…あ…」

宇佐見は爆ぜる。野分は宇佐見の白濁を全て飲み込む。

「宇佐見さんの美味しかったです。ごちそうさまでした」「おまえな…」

さらつと云つた野分を宇佐見は睨みつける。

「宇佐見さん。俺の気持ち伝わりましたか?」

「こんなことされて、伝わるわけないだろ」「やつぱり、しないと伝わらないのでしょうか…」

「何をしても無駄だ。帰る」

「駄目です。今夜は帰らせません」

野分は起き上がる宇佐見を押さえつけ、宇佐見の窄まりに指を入れては内壁を搔き回す。

その行為に宇佐見は顔を歪ませる。

「そんな顔のあなたも素敵です。もつとその顔、俺に見せてください」

そう云つと指を引き抜き、野分は自身を宇佐見の中へ進入させた。瞬間、宇佐見は痛みに耐えられず声を上げる。

「宇佐見さんの喘ぐ声、聞きたいです」

「おまえは…ちゅうもんが…おお…すきだ…」

「それは、宇佐見さんが好きだからです」

何度も強く突き、宇佐見を追い込む。その度に宇佐見は声を上げた。

「んつ…はあ、あつ…あつ…あ…」

「もつと聞かせてください」

野分は宇佐見の腰を掴み、更に奥を突く。

激しい律動を繰り返され、宇佐見の限界も近かつた。

「く…さま…はな…れる…」

「もう限界ですね。では一緒にいきましょっ」

「はあ、あつ、の…のわ…き…あつ、あつ…」

「うさみ…さん…」

一人はほぼ同時に爆ぜた。

野分は宇佐見の中に全て出すと、息を整えている宇佐見の頭を撫でて云う。

「宇佐見さんは、熱くて気持ちよかつたです」

「そうか…」

「宇佐見さん。俺のはどうでした?」

「どうとも思わん…」

「そうですか…でも、俺の想いは云わりましたよね?」

「伝わってない」

落ち込む野分に宇佐見はきつい言葉を放つ。

「このことは黙つておいてやる。だから今後一切、俺に近づくな。わかつたな!」

「イヤです!宇佐見さん。俺を捨てないでください!」

野分は強い眼差しで宇佐見を見つめでは云い返す。

「捨てるもなにも、俺達は付き合つてもないだろ

「これから付き合えれば問題ないです!」

「草間、何度も云つたらわかる。俺はお前とは…」

「宇佐見さん。イク寸前で俺の名前呼んでくれました。それって俺とやつて俺のことが

好きになつたからですよね!」

宇佐見は、口イツに何を云つても無駄だ。と呆れて溜息を吐く。

「はあ～お前ってヤツは、どうしようもないヤツだな
「それって、付き合つてくれることですよね！」
「どうしてそうなる」

目を輝かせて見つめてくる野分に、宇佐見は根気負けする。
「ならば、俺がお前の家庭教師になる。ところでのせどうだ
「え！いいんですか！」
「但し、罰として家事全般をやつてもらう」
「はい！宇佐見さんのために頑張ります！」
野分は宇佐見に抱きついて喜びを表現した。

「あ！」

「どうした」

「ヒロさんの家庭教師どうしましようか…」

「弘樹はこれから忙しくなる。断つて問題ないだろ」

「そうですかね…」

「心配するな。俺から伝つておく」

「ありがとう」ゼコます

「つして、野分は宇佐見の家庭教師を受けることになつた。

翌日、宇佐見は上條の家に行く。

呼び鈴を荒々しく何度も押すと、上條はドアを開けた。

「あ、秋彦！？なにしにきやがつた」

「お前に話しがある」

「ん？はなし？立ち話もなんだ。中に入れ」

「いや、ここでいい」

「で、話しつてなんだ」

「お前、家庭教師してるそうだな」

「なんで秋彦が知つてるんだ！誰から聞いた」

「草間つてヤツから聞いた」

上條は野分の名前を聞いて目を丸くする。

「野分！？秋彦アイツと知り合いだつたのか？」

「知り合い… そうだな。危ない関係とでも言つておへか」「危ない関係！？それ、どんな関係だ！」

「聞いたら弘樹は失神するだろ？ね」

上條は宇佐見に笑われてムキになる。

「野分は俺の生徒だ。教える」

「だが、草間はもう弘樹の生徒じゃない」

「はあ？」

「昨日、俺の生徒になつた」

「秋彦の生徒？」

「だから草間はもうここへは来ない。話しは以上。それじゃ」「宇佐見は云つだけ云つと踵を返す。背中で上條が叫ぶ。

「おい！秋彦！お前まさかカテキョウ始めたのか？」

「ま、そういうこと」

宇佐見は上條の言葉を背中で聞き、振り返らず去つて行つた。上條は、あの人を寄せ付けない秋彦がカテキョウ？。と不思議に思つたが、

俺の知らないうちに秋彦は変つた。と悲しい気持ちになる。

宇佐見が家庭教師を始めてから一週間が経過した。

野分はバイトが終わると、真つ先に宇佐見のマンションに行く。来ては手際よく家事をこなしていく。

「あ、宇佐見さん。お疲れ様です。今コーヒー淹れますね」「どうも」

マグカップにコーヒーを淹れ、リビングのローテーブルに置く。宇佐見はコーヒーを一口飲むと、野分の視線に気がつく。

「なんだ？」

「宇佐見さんは、コーヒーを飲む仕草もカッコイイです」「またそれか…」

何度聞いたであらうその言葉に、宇佐見は呆れて溜息を吐く。

「で、お前は今日もアレをするのか？」

「はい！します！これは家庭教師をしてもらってるお礼なので」

「どうも、まだアレに慣れん…」

「そうですか…俺の努力がまだ足りないんでしょうか…」

落ち込む野分を見て、宇佐見は野分の頭を撫で回す。

「そう、落ち込むな。お前はお前なりに頑張ってる」

「そうですか！嬉しいです。俺、宇佐見さんのためにもっと頑張ります！」

「あれ以上、頑張らんでいい」

宇佐見はマグカップをローテーブルに置くと、ソファへ押し倒される。

そして野分は宇佐見の耳元で「宇佐見さんの声、聞きたいです」と囁いた。

「そんなんに聞きたいのか？」

「はい。俺、宇佐見さんの喘ぐ声好きです」

「どうせ、お前が好きなのは、声だけじゃないだろ」

「はい！俺は宇佐見さんの全てが好きです」

宇佐見が苦笑すると、野分はキスをして呟く。

「宇佐見さん、そろそろ俺と付き合つてくれませんか？」

「考えておく」

「そうですか…」

「ま、あとは今後のお前の頑張り次第だな」

「それって、やっぱり俺のアレが気に入ってるんですね…」

「なぜそうなる」

「じゃあ早速、試しましょ」

「おー！までー！あ…」

宇佐見のモノを咥えた野分は先端を舐め回す。

こつされるのも何度目か、宇佐見は野分の愛撫に感じていた。

それは以前と違い、こうしてくれた野分を愛おしいとさえ思えた。

「宇佐見さん。気持ちいいですか？」

「あ、ああ……」「

「ではもつと気持ちよくさせてあげます」

「やめ……ろ……今日は……もつ……い……」「

「黙ります。俺が納得できません」

宇佐見は野分にされるがまま流れさせていく。

「宇佐見さん……す……ぐく……気持ちいいです。あ、そんなに締め付けないでください」「

「そんなこ……はやく……つ……くな……」「

「宇佐見さん。すみません。俺、もう我慢できません」「

「の……のわ……れ……」「

「つさみ……さん……愛してます……」「

「は、あ、あつ、あつ、あ、あ、あつ……」「

宇佐見は知らず知らずのつひ、野分を好きになっていた。
宇佐見が野分に「好きだ」と告げたのは、この夜のことだった。

(後書き)

まず始めに。純情エゴイスト（野分×弘樹）が好きな方は読んでいらっしゃらないと思いますが、興味本位で読んでしまった方へ。こんな話をしてしまいますみません。

攻め同士のエシーンがどうしても書きたくて、好きな攻めキャラ野分と秋彦をくっ付けました。

本来のカップリングが違うため、書いたはいいけど載せるか悩みましたが、私が思つてることを皆様にも読んで頂きたく、今回投稿させて頂きました。

少しでも萌えて頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5823t/>

好きすぎて

2011年10月8日15時40分発行